

觀世音菩薩普門品に就て

松見 得 忍

普門品は世間一般に觀音經として讀まれており、觀世音は慈悲の象徴として日本佛教の一つの流れをなしている。また、觀音信仰は日本佛教の受容の仕方としても重要な意義を持つていゝる。然し觀音の慈悲なり利益なりをどの様に理解する事が正しいかは必ずしも明らかにはされていゝるとは言えない。

原典研究者によると觀音の語義について本多義英博士はその著、法華經論に於てこう述べておられる。

觀世音とは世音を觀ずるとの意ではなく、世を觀ずる音を有する者、又は世を觀ぜしむる音を有する者、即ち、音聲の示現者と解すべきである。普門品の長行はその意味で説かれていゝる。然るに世尊妙相具以下の偈頌は佛菩薩の慈悲を人格化し觀音と云う菩薩としたのでその意味で世音を觀ずる者となつたのである。然も偈頌は單行經として流布していたがその後、長行に附加されたものである事は譯經史上、明瞭な事である、と。

世音を觀ずると解すべきか、世間を觀ずる音聲を有する人と讀むべきか、は何れにしても、世間を觀ずる音の所有者は同時に又、世音を觀ずる人でなくてはならぬであらう。そしてこの觀ずるとは要は智慧であつて、シナの註釋家が觀を能觀の智と理解してゐるのは當然のことである。此の音と智慧との關係に於て思ふ事は入音聲慧法門という事である。音聲慧法門に入るとは一切の譏譽を超越する事であつて、傳教は顯戒論の中でこの

事を述べてゐる。そこで世を觀ずる音の所有者は入音聲慧法門の人と解してもよいと思われる。

普門品をみると、*〃*是の觀世音を聞いて一心に名を稱せば、觀世音菩薩即事に其の音聲を觀じて皆解脱する事を得せしめん*〃*とある。觀世音を聞くとは勿論、その名を聞く事でその名を聞き名を稱うると菩薩はその稱名を觀じて苦を解脱せしむるのである。稱名を菩薩が觀ずるとは、世を觀ぜしむる自らの音聲を菩薩自身が觀ずると云う事であつて、入音聲慧法門の人と云う事が出來よう。このように考えてくると、智頌が*〃*觀世音とは智慧莊嚴なり*〃*と述べまた、*〃*音とは機なり*〃*その機に*〃*人天、二乘、菩薩、佛、の四を分ち、佛機とは一切無礙の人に於て諸音の機を揀却し、唯、佛音の機を取つて應を設く。この機應の因縁を以ての故に觀世音と名づく*〃*、と説く事は意味の深い事である。

念彼觀音力と云う事も自らを智慧莊嚴する事であり音聲慧法門に入ること以外ならぬのであらう。拔苦與樂というも智慧莊嚴でありそこから福德莊嚴の利益が顯現するのであらうと思われ。

現代の日本佛教は福德をのみ強調してゐるかに見える。智慧莊嚴の面を解明するところに觀音も現代に生き生きと輝くであらう。恰も美しき觀世音の像が歴史を隔てて現代人の憧憬であるように。

(紙數に制限があるため、概要を記述するに止つた。)